

〈巻 頭 言〉

公衆衛生分野の国際協力

村松 稔

近年わが国の国際協力、ことに開発途上国に対する協力の必要が論じられている。

第二次世界大戦の終結後、人間社会における最大の問題の一つは、北と南、先進国と開発途上国の間の溝をいかにして埋めるかであった。狭くなった地球のうえであまりに格差の激しい国々、地域が隣り同士に暮らしていれば、世界平和の実現にとって大きな阻害因子となる。開発途上の国を早く引上げて、世界を平準化することに関心が向けられた。

そして、第一に経済開発が進められた。まず、金の力をつけようということである。しかし、国連の「開発十年計画」が回を重ねるにつれて、経済的な開発援助のみでは一般大衆の福祉の向上には十分寄与しないことが注目されだした。ここに、社会開発の必要が言われるようになり、人間生活の infrastructure の整備、教育の普及が強調されるにいたり、さらに今日では WHO の宣言によって知られる「健康」の社会開発が唱えられている。

これまでわが国の国際協力は明らかに経済面が主体であった。しかし、このような局面の推移につれてわが国でも社会開発へのサポートの重要性が指摘され、他の多くの領域とともに公衆衛生、地域保健もその不可欠な一環として捉えられるにいたった。

ところで、今日の世界情勢は複雑に動いている。ソ連とアメリカの緊張が急速に消えたと同時に、政治、経済の状況が急変した。アメリカはかつての世界における絶大な国際協力のリーダーシップを放棄し、世界の警察となることをもって自らの役割と見なすかのごとくである。対してヨーロッパは、ソ連圏の崩壊とともに、大量の人口移動と経済援助の要請に直面して、他の地域を顧みる余裕を持たない。かくして世界の目は、他国を顧みる余裕を持つ唯一の金持ち国とも言うべき日本に集中することとなった。好むと好まざるにかかわらず、わが国の貢献が求められていると言われる所以である。公衆衛生、地域保健の分野においても、わが国の経験を学びたい、協力をしてほしいという要請が出てきている。

ひるがえって、わが国としての最大の問題は、国際協力の歴史がまだ日が浅く、経験が不足しているという点にある。そのため、これがもっとも痛切に現れるのは、わが国の持つ人的協力の弱体さである。

国際協力の要は実は人にある。いくら物を送り込んでも、物はいつかは消耗する。物をもらえば、特に日本のように「ひも」の付かない物の場合、相手国は大喜びである。しかし、それだけでは本当の協力にはならない。公衆衛生ではむしろ人の交流が最大の国際貢献なのである。

公衆衛生は異なる職種の協力のうえに成り立つ。公衆衛生のすべての分野で国際協力のための人材が育って欲しい。しかし、わが国の場合は特に医師のプールが乏しい。たのもしきことに国際協力に関心を持つ若い医師は数が増えている。この人達をどう育て、どう働いてもらうか。勿論人を容れる器である組織、人を動かすシステムがまず改善される必要がある。しかし、とにかく公衆衛生分野での国際協力のための人材育成が重要である。

この意味で、私の故郷である国立公衆衛生院には期待すること大である。長い年月をかけてわが国の公衆衛生もようやく国際協力の意義を理解し始めた。

(元衛生人口学部長)